流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和五年四月句会（第一三一回）
兼題　［雪解け］
開催日　令和五年四月二十二日
開催場所　流山市生涯学習センター
出席者　七名
投句者・選句者　八名

（五点句）

●黒猫のすかして過る春の宵　　寿歩

選評…春の宵は単に夜になってまだ間もないという時間的なものだけではなく、情趣溢れたすばらしい時で、その一刻は千金に値すると云われたりもする。投句の中にもあるように、人恋しさに街歩きをしてみたり、友と一杯やりたくなったりする。

人だけではなく猫も同じなのかもしれない。一夜を共にせんとして、恋猫のもとへでも行くつもりか、黒猫が気取って通り過ぎて行くというのだ。春の季語に猫の恋というのがあるが、この句の黒猫は恋狂いをしているとも思われず、何処か謎めいたところがあり、新しい物語の世界が始まりそうな気配を感じさせる。

（夢心記）

●月朧ものみな緩く四方の中　　小牧

選評…月がおぼろに霞んでいる。月の周りだけでなく、自分を包む空気、万物あらゆるものが膨張し緊張が解けている。

作者は抽象的な物理を簡潔な一物仕立てで表現しました。特に下五、よく出てきたものです。

何度も音読していると、“もの”がリフレインされていることに気付きました。韻律が心地よく感動的な一句です。

（玄鳥記）

（三点句）

寄合の帰路の行灯春の宵　　玄鳥
うすみどり風に吹かれて花は葉に　　玄鳥
喪の人に言葉を探す春の雨　　夢心
同じ木に紅白の花咲く不思議　　夢心

（二点句）

春嵐丸めし背中押さるまま　　小牧
初穫りのスナック豌豆瑞々し　　夢心

（一点句）

歩こう会打ち上げで飲む春の宵　　夢心
君の待つカフェへ急(せ)いてる春の宵　　徹心
蝌蚪追いて小川踏み入る足は泥　　艸寛
背に画集足取りはずむ桜道　　寿歩
公園に桜蕊降る人気なし　　徹心
花の下はしゃぐ花嫁幸ふわり　　寿歩

（投句）

いつもの道そぞろ歩きす春の宵　　小牧
春の宵汝に会ひて酒場へと　　則子
春の宵心身軽くなる着衣　　互酬
春の宵孫に教わるスマホかな　　艸寛
十五の子指さす先に母子草　　則子
橋に立ち一ひら流る花くずや　　則子
早歩き纏わり付くは花の舞　　互酬
春の宵人恋しさに街歩き　　徹心
畔塗りや空を見上げて汗を拭く　　艸寛
横文字の春眼開くチャットＧＰＴ　　互酬

『句会後記』

今月の句会は「春の宵」の兼題で、句作りが行われ八人二十四句の句会も安居さんの進行に慣れてきたようです。感謝です。

句ごとに対する評句も各人が自由に発言出来て、楽しい集いになってきた気がしております。師は無しの会なので、各自が自由な発想で自分なりの俳句を詠んでいくことが、良いのではと思っています。

コロナ禍も緩んでマスクも自由になり、ほんとの意味での身も心も軽くなった春を迎えた句会でした。

（互酬記）